
菊野中学校鉄道部～活動報告～

山陰鉄道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

菊野中学校鉄道部～活動報告～

【Nコード】

N1820P

【作者名】

山陰鉄道

【あらすじ】

年に4回の鉄道旅行。果たして全員無事に帰ってこられるのか？

プロローグ 旅の出発点（前書き）

注意！

この小説に出てくる列車の時刻は、作者の都合上、2010年4月現在のものです。ご注意ください。

プロローグ 旅の出発点

「7月26日松江駅前、午前5時集合」

そんなことが書かれた紙を見ながら、ため息をついている少年が1人いた。名は坂口浩平、中学3年生だ。なぜため息をついているかだが、それにはまずこの少年の所属する部活動について説明しなくてはならない。

島根県某市にある市立菊野中学校。4階建ての校舎の最上階、4階の一角に小さな部屋がある。

（鉄道部）

ドアにはこう書かれたプレートがさげてある。

部員は1、3年合わせて6人。1年生の福川大吾、2年生の北河仁と沖村千春、3年生の三国理沙と浮谷啓祐、そして部長の坂口浩平である。

顧問は社会担当の白崎彰人先生、副顧問は理科担当の新実信之先生だ。

普段の活動は、時刻表を見ながらいくつも旅行の計画を立て、それを顧問に提出するというものだ。そして年に4回、部員が立てた計画の中からおもしろそうなものを選んで旅行をする。ちなみに費用はすべて学校負担だ。

部活動についてはざっとこんなところだ。

さて、なぜ少年がため息をついていたかだが、原因は数日前の部活動にさかのぼる。

「さて、明日から夏休みに入りますが今年度初めての旅行を行いたいと思います。」

突然顧問の白崎がそう告げた。

（マジかよー）

浩平は今までの計8回旅行を経験しているが、楽しい思い出となつたものはほとんどない、いやひとつもない。なんせ無茶な内容ば

かりなのだから。春の旅行では、危うく島根に帰れなくなるところだった。だが、いやな理由はもうひとつある。

「えーっと、今配った紙が集合場所と集合時間だ。遅れるんじゃないぞ。」

「先生、旅程表はないんですか？」

質問したのは何も知らない1年生の大吾だ。

「あー、福川は初めてだからな。行き先、日程などは当日集合場所の松江駅^{まつえ}で発表する。」

これが浩平が旅行を嫌う最大の原因だった。なんせ当日まで行き先がわからないのだから何を用意すればいいかわからない。全員時刻表を没収されて、「行き当たりばったりで、東京^{とうきょう}まで行って帰って来い。」ということもあった。

とまあこんな具合で夏休みに入ってしまった、その旅行がとうとう明日となったため頭を悩ませていたのだ。

（まあ無茶苦茶なのはいつものことだし、いつも通りいろいろ準備しときゃいいか）

このとき浩平はまだ知らなかった。今までとはひとあじ違う「旅行^{シン}」が待ち受けていようとは。

1-1、出発式

7月26日午前4時過ぎ、松江駅前^{まつえ}。

「さすがにまだ誰も来てないか。」

部長である浩平^{こうへい}は早めに来ていた。まあ、コンビニで買いたいものがあつたというのもあるのだが。

「部長さーん！」

突然の声に驚き、振り向くと大吾^{だいご}が立っていた。

「お前・・・いったいつ来たんだ？」

「えーっと、確か4時前だったと思います。それより、何でそんなに荷物があるんですか？」

もつともなことだった。浩平は大きなリュックサックと旅行カバン、それに肩からも1つカバンをさげいた。

「お前も今にわかるよ・・・」

そう答えるしかなかった。そして午前4時30分、予定より30分早いが全員集合した。

「全員そろつたな。ではこれが今回のたびの内容だ。」

そういつて先生から配られた紙は、とんでもないような内容だった。

〔平成22年度第1回鉄道部旅行内容〕

1、内容

実際の鉄道を使用しすごろくを実施する。ゴールは枕崎駅^{まくらさき}である。

2、日時

平成22年7月26日～30日

3、ルール

- ・1人1枚ずつ青春18切符を使用する
- ・2人組で行動する
- ・どんなルートを使ってもかまわない

- ・5日以内にゴールする
- ・1組1個渡す携帯電話を使って先生に質問してもかまわない。

「組み分けは自分たちでしてくれ。それから坂口、これ携帯電話だから。あと早くゴールした者には景品があるから。では解散！」

そう言い残して先生は去っていった。皆の中で沈黙が続く。

「えーっと・・・ペアを決めようか。」

このままではどうしようもないのでとりあえずペアを決めることにした。

「えーっと・・・とりあえず大吾は初めてだから準備もしてきてないだろうし、僕と組もうか。あとは・・・おきむら沖村とみくに三国、きたがわ北河とうきたに浮谷でいいかな？」

特に反対も出なかったため、このペアで決まった。

「じゃあ、これ携帯電話。後はもう各自行動して。」

波乱の旅行・・・いやゲームはこうして幕を開けたのだった。

1-2、作戦会議

どの列車に乗るにしても時間があるので、浩平と大吾はとりあえず松江駅の中へ行くことにした。

「いつもこんな感じなんですか？旅行って・・・」

「いや、いままで8回経験したけどこんなの初めて。」

あくまで冷静さを保っていた浩平だったが、相当動揺していた。
(いくらなんでも無責任すぎるだろ。っていうか親の同意得てんのか？それ以前に学校どんだけ金あるんだよ！)

「そういえば、結局その荷物何なんですか？」

「お前・・・まだ気付いてないのか？5日間列車に乗りっぱなしなわけないだろ。」

「???」

やはり大吾は準備をしていなかったようだ。ペアにして正解だった。

「寝る時はどうするんだよ！」

「あーーーーー！！！！！」

「大丈夫、いろんなもの、2人分持ってきてあるから。だからペアになったんだよ、まあ毎年こうだから。」

「・・・酷いですね、この部活」

「やっと気付いたか・・・」

まあ愚痴を言っているだけでも始まらないのでルートについて話し合うことにした。

「で、ルートだけ・・・どうする？」

「そうですね、やっぱり本数の多い山陽本線に出たほうがいいんじゃないですか？」

「なるほど、そうしようか。じゃあ伯備線経由として、最初に乗るのは・・・120D普通列車鳥取行きだね」

「じゃあ、ホーム行きますか？」

時計はまだ午前5時2分を指している。

「いやまだ時間あるから・・・買い忘れたものとかない？」

「そういえば、飲み物買ってないです。」

「じゃあ買いに行こうか。」

そう言って2人は去っていった。

・・・で部長以外のペアのことだが、おきむら沖村・みくに三国の女子ペアも同じルートについて話し合っていた。

「やっぱり伯備線で岡山に出たほうがいいですかね？先輩はどう思います？」

「普通はそう考えるよね。でももし伯備線で1日目終了ってことになったとして、あんな山の中で大丈夫なのかな・・・」

「なるほど！じゃあ山陰本線ですか？」

「うん。私はそう考えてるよ。」

「じゃあそうしましょう！えっと、125Dですネ乗るの。」

「うん、時間あるけどどうする？」

「ホームの待合室で待つときましようよ！」

「うん・・・そうしよっか。」

三国はいつになくハイテンションな沖村が気になっていたが、とりあえずホームに行くことにした。

一方、きたがわ北河・うきたに浮谷ペアでも同じような会話が交わされていた。

「やっぱ、山陽経由でいいっすよね？」

「うん、いいと思うよ。」

「じゃホーム行きますか、浮谷さん。」

そう言ってまた、この2組もホームに消えていった。

この3組の選択が後に結果を大きく左右することになる。

2-1、初めての旅は雨の味がした？（前書き）

（注意）

これから先小説に出てくる天候、ダイヤ乱れ、事故などは全て架空のものです。現実の出来事とは全く関係ありません。また、列車の到着ホームなども間違っているものがあると思います。

ちなみに、この章は浩平視点で進みます。

2-1、初めての旅は雨の味がした？

6時10分、松江駅まつえのホームで僕たちは列車を待っていた。

「お前たちもかよ。」

不機嫌そうな声でそういったのは北河きたがわだ。

「仕方ないだろ、ルート2つしかないんだから。」

（まったく、2年のくせに・・・）

そんなことを思いながらすかさず反論する。

「まあまあ。僕たちだけしかないってことは、女子は山陰周さんいんりなんだね。きつと。」

2人の仲裁に入っただのは浮谷うきたにだ。ナイス！

「先輩たち、どうせこれからバラバラになるんですから。」

大吾だいごも仲裁側ちゅうさいさへに回る。後輩は後輩でもどうしてこんなに違うのか・

・

「それもそうだね・・・よしじゃあ大吾、サイコロ振ろうか。」

「はい。」

最初なので僕がサイコロを振る。出た目は・・・1だった。

「1！」

「いきなりですか！ということは東松江ひがしまつえですか・・・」

さすがにこれにはがっかりした。この先が心配になってきた・・・

「じゃあ、俺も振りますよ。」

と言って北河がサイコロを振る。出た目は5だった。まったく、

神様は何をやっている！

「5ということは・・・米子よなごだね。」

そこへアナウンスが。

「まもなく鳥取行とっとりき普通列車、発車です。ご利用の方はお急ぎください。」

あわてて車内に入る。その10秒後にドアが閉まった。120D普通列車が定刻どおり6時21分に発車した。

6分後、6時27分、定刻どおりに東松江に到着した。この章の主人公である僕たちはここで下車する。

「えーっと、次は7時11分の280M新見行きですね。」

大吾がすばやく時刻表を取り出し、次の列車を調べた。さすが、しっかりしている。

「あと30分か・・・今のうちに朝飯食べようか。」

「その前にサイコロ振りましょうよ。」

そう言って大吾がサイコロを振った。

「6ですよ!」

「ということは・・・伯耆大山か。」

朝食も食べ終え、7時11分に280M普通列車に乗り込んだ。

米子に着いたときのことだ。ドアが開き2人の少年が入ってきた。北河・浮谷ペアだ。

「部長たちはどこまでなんすか?」

「伯耆大山だよ。」

「う・・・うちは東山公園っすよ。」

「まあ、お互い頑張ろう。」

それから、誰も一言もしゃべらなかつた。空気が重い・・・7時46分、揖屋のあたり降っていた雨がひどくなつた影響もあり3分遅れて伯耆大山に到着した。何か嫌な予感がする。・・・そういえばラジオを持ってきたつけ。

「次は9時11分ですよ・・・ってさっきから何してるんですか?」

「ラジオ聞いてるんだよ。なんか嫌な予感がして・・・」

その予感は当たってしまった。まったく、今日は本当についていない。

『活発な前線の影響で、九州から東北にかけて山沿いを中心に大雨となつています。特に中国地方では非常に激しい雨が降っていると
ころがあり、これからさらに雨脚が強まる見込みです。また、山陰
地方では風も強く、松江地方気象台では先ほど島根県全域に暴風警
報を発令しました。また、鳥取地方気象台も鳥取県全域に強風注意

報を発令し、警戒を呼びかけています。この前線は明日も中国地方を中心として、本州付近に停滞する見込みで・・・』

「やばいですね、これ。」

「引き返しても風速規制に引っかかるだけだろうし・・・」

「このまま山越えですか・・・」

「まあそうするしかないって。」

今日中に倉敷^{くらしき}まで出ればいいけど・・・

2-2、そして僕たちは倉敷に向かった

9時28分、17分遅れの942M普通列車が伯耆大山^{ほうきだいせん}に到着した。この列車にも北河・浮谷^{きたがわ うきたに}ペアが乗っていたが、双方とも一言も話さなかった。サイコロの目は2だったので伯耆溝口^{ほうきみぞぐち}で下車する。

9時44分、22分遅れで伯耆溝口に到着した。やはり遅延^{ちえん}が拡大しているようだ。

「結構遅れてますね。まあこの雨と風じゃ仕方ないですけどね。」

「運転見合わせはないと思ってたけど・・・こうなるとさすがに心配になってきたな。」

不安の中サイコロを振る。出た目は6。

「生山^{しょうやま}ですか、人が結構いそうな駅ですね。」

「特急もとまるしね。それより次乗る列車が来るかどうか・・・」

そして予定の11時22分、案の定列車が来ない。というか来る気配すらない。なんせやくも12号を最後に1本も列車が通っていない。これではもう遅れているというか、どこかで止まっていると考えた方がいいかもしれない。

「部長、どうします？これ完全に止まってますよ。」

「そんなこと分かってる、とにかく待とう。」

そして13時8分、106分遅れの824M普通列車が到着した。どうやら、備中神代^{びっちゅうこうしろ}と新見^{にいみ}の間で斜面が崩れたらしい。復旧作業は終わったようだが、まだ雨量規制などがかかっているため遅れは拡大中とのこと。

「やっぱり止まってたんですね。」

「ああ。今日中に何とか倉敷^{くらしき}まで出たいとこだけど・・・難しそうだね。というかこれすごろくだし、遅れあんまり関係ないね。」

14時5分、110分遅れで生山についた。サイコロの目は5、次は備中神代だ。駅舎で待つことにした。そういえば前から大吾^{だいご}に聞きたいことがあったつけ。

「大吾、そういえばお前なんでこの部に入ったんだ？」

「突然何ですか！」

「だってお前小学生のころ鉄道に興味なんてなかったろ？ ちょっと気になって。」

「・・・正直楽だと思って入ったんですよ、もしきつかったらすぐやめようって。でも部活やってるうちに楽しくなってきた。」

「そうだったのか・・・そういうやつ多いんだよな、まあすぐやめるけど。」

「あ・・・でも今は本当に好きでやっていますから！本当です！」
半泣きで訴えてくる。俺ってそんなにきつく聞いたっけ・・・

「いや、別に怒ったりしてないから。」

「いや、そんなことは・・・そういえば気になってたんですけど、あの2人どうしたんですかね？」

「あの2人って？」

「北河さんと浮谷さんですよ。さっきから1度も姿見てないですけど。」

「さあ・・・小さい数字ばっか出てんじゃないの？」

適にごまかしたものの、正直かなり気になっていた。あの2人は東山公園でサイコロを振ったはずだから伯耆大山から根雨のどこか・・・いや、伯耆大山から伯耆溝口までは一緒に乗っていたから江尾、または武庫、根雨のどこかで降りているはずだ。それ以降上の普通列車は824Mまで1本も無かった。つまり、いくら小さな数字が出ようと倉敷を目指しているのなら824Mに乗ってきたはずなのだ。しかしあのペアは乗ってこなかった。どういうことだろう？

「・・・よう、部長！」

「ふえ！どうした？」

「どうしたじゃ無いですよ！列車もうすぐ来ますよ、放送あったのに・・・聞いてなかったんですか？」

「ごめんごめん、ちょっと考え事してて。それにしても早いね。」

「回復運転したんでしよう、雨も止みましたし。」

「えっ、いつの間に・・・」

「ちょっとしっかりしてくださいよ。それよりホーム行かないと、列車来ちゃいますよ。」

15時57分、ホームに着いてすぐに到着した61分遅れの826Mに乗って生山をあとにした。

2-3、災難は忘れた頃にやってくる・・・のかな？

その後も遅れてはいるものの列車は動いており、雨量規制も解除されたので遅れは縮まっていった。

16時31分、51分遅れで備中神代^{びっちゅうこうじろ}に到着した。サイコロの目はまた5、次は方谷^{ほうこく}だ。布原^{ぬのはら}は伯備線の列車は停車しないが、一応駅としてカウントした。僕が部長なので大吾も従ってくれた。

「やばいですよ・・・ほんとに倉敷^{くらしき}まで出られないかも。」

「大丈夫。最悪先生に電話して特例でも何でも頼めばいいんだし。」
「まあそんなくらい認めてくれますよね。」

そんなことを話していると、突然携帯にメールが届いた。

“このメールは全ての携帯に送信しています。その携帯を持っているグループのメンバーを報告してください。白崎^{しろざき}”

「えーっと俺と俺と大吾だから：“坂口浩平^{さかぐちこうへい}、福川大吾^{ふくかわだいご}です。”でいいか。」

返信し終わったところでちょうど列車が入ってきた。新見^{にいみ}行き828Mである。12分遅れの18時16分入線である。

「目的地は方谷だから、新見で乗換だね。」

芸備線の列車しか停車しない布原を通り過ぎ、18時31分、8分遅れで新見に到着した。ホームにはすでに862Mが停車している。

「まだ発車まで時間あるから、夕飯買おうか。」

そう言っていたん改札を出た。待合室横に売店がある。

「ところでお前、いったいいくら持ってきてんだ？」

「3万ですけど・・・」

「なら十分足りるね。これから先のことも考えなくちゃいけないけど・・・」

できるだけ安く済ませるために、おにぎり2つとお茶を購入し、停車中の862M岡山^{おかやま}行きに乗車した。18時54分、ガクンと言

う衝撃とともに、列車は定刻で発車した。久々の定時発車だ。

特に徐行することなく走行し、19時20分、定刻で方谷に到着した。サイコロの目は3、備中高梁だ。びっちゅうたかはし

「もうダイヤ復帰したみたいですね。」

「いや、山陰さんいんから来るやくもは遅れてるかも・・・」

そんな話をしていると再びメールが来た。

“坂口君、宮田君へ。次の目的地に着いたら報告してください。

白崎”

「・・・宮田君”って誰のことですか？」

「先生が間違えたんだろ・・・」

「・・・それはさておき、何のようですかね？あの無責任な先生が・・・珍しい。」

「おい、口に出しちゃだめだぞ。たとえ事実でも・・・」

「部長、なんか心当たりありますか？」

「いや、前も言ったけど2人ペアで行動ってのは初めてだから。俺もよくわかんない。」

「いいことならいいですけど・・・」

「まあいいや。次の列車は864M・・・ん？電話だ。」

どうやら僕たち以外の2組のうちのどちらかのようだ。

「もしもし」

『浩ちゃん？助けてよ・・・』

「その声は・・・啓祐けいすけか。どうした、そんな声出して。お前、副部長だろ。もう少ししっかりしてくれよ。2年生も一緒なんだから」
紹介が遅れたが、浮谷うきたには副部長である。ただ、いざとゆうときにこうなってしまうのが欠点だ。その点では仁じんのほうがいっしょにやるかも。

『どうしたもこうしたもないよ！それよりなんとかしてよ、頼むから！』

「だから何が？」

『列車が・・・来ない。』

2-3、災難は忘れた頃にやってくる・・・のかな？（後書き）

今日も山陰鉄道をご利用いただきましてありがとうございます。
ご乗車の皆様へお知らせです。本日より一旦“浩平&大吾”を休止し、他のペアの話に移行します。話の順番が前後し見苦しいかと思いますが、ご了承ください。

以上、山陰鉄道からのお知らせでした。

3-1、章の始めなのに短いのは作者の都合・・・だとか（前書き）

今日も山陰鉄道をご利用いただきましてありがとうございます。

この章は菊野中学校鉄道部副部長である啓祐視点で進んでいきます。

3-1、章の始めなのに短いのは作者の都合・・・だとか

6時10分、松江駅まつえのホームで僕たちは列車を待っていた。

「お前たちもかよ。」

不機嫌そうな声でそういったのは仁じんだ。まったく、2年生のくせに威勢がいいんだから。

「仕方ないだろ、ルート2つしかないんだから。」

部長の浩こうちゃんが反論する。

「まあまあ。僕たちだけしかないってことは、女子は山陰周さんいんりなんだね。きつと。」

僕はすかさず2人の仲裁に入る。まったく、犬猿けんえんの仲というのはこういうののことを言うんだろうか。

「そうですよ、どうせこれからバラバラになるんですから。」

大吾だいごも仲裁側ちあんさいに回ってくれたようだ。さすが唯一の1年生、しっかりしている。仁君もこのくらいしっかりしてくれればいいんだけど・・・

「仁君、あつちは気にしないでこっちはこっちでやろう。まだ先は長いんだから。」

「祐すけさんがそういうんなら・・・」

「“祐さん”って何！水戸みとの副将軍のお供なんかか！」

「だってなんか呼びやすいじゃないすか。」

とか言ってる間に、向こうはサイコロを振ったようだ。

「じゃあ、俺も振りますよ。」

出た目は5。ということは・・・米子よなごか。

そんなことを言っているとアナウンスが。

「まもなく鳥取行とっとりき普通列車、発車です。ご利用の方はお急ぎください。」

（危ない危ない。）

あわてて車内に入る。本当に最初から最悪だ。120D普通列車

が定刻どおり6時21分に発車した。

3—2、「・・・」が20個もある章です。

「祐さん・・・祐さん！」

「ん・・・んう？」

「しっかりしてくださいよー。もう着きますよ。」

「気がついたらもう列車は米子駅よなごの場内に入っていた。」

「あれっ、いつの間に？」

「揖屋いや過ぎたあたりで寝ちゃったんですよ。」

「そうか・・・」

きつと朝早かったので寝てしまったんだろう。僕の家から松江駅まつえまで自転車で1時間くらいかかるから。

「荷物の準備してくださいよ。」

「でも終点だからそんなに急がなくても・・・」

「もお、何言ってるんですか！鳥取とっとり行きですよ、この列車。早く眠気覚ましてくださいよ。」

まさか、仁君じんに指摘されるとは・・・

「ほらほら、着きましたよ。」

「分かった、分かったから。」

せかされるままに米子駅のホームに降り立つ。構内は工事中で少しごちゃごちゃしているような気がする。

「さっ、早くサイコロ振りましょ！」

「そんなに急がなくても良いでしょ。」

ほんとにせっかちな。まあそこが良いところだったりするけど。

「えーっと・・・1」

「1ー1ーっ!？」

仁君、自分で振って出したくせにどんだけ驚いてんの・・・

「ということは東山公園ひがしやまこうえんだね。」

「・・・」

「どうしたの？」

「・・・祐さん、もう一回振りましょう。」

「えっ、いや・・・それはだめでしょ？」

「いいじゃないですか、どうせ誰が見ていると言うわけでもないんですし。」

「いやいやいや、ずるはだめだよ。勝負は公平に。」

「ちえっ」

まったく、ずるしようとするわ、先輩にため口使うわ、挙句の果てには舌打ちしてくるし・・・ほんと、仁君にはかなわない。

「あ、でも今乗ってきた列車、まだ停車中つすよね？」

「えーっと、今6時58分だから・・・って、まさかまた変なこと考えてる？」

「うっ・・・別に、なんでもないです。」

まったく、ほんとにまったく。頭の中をのぞいてみたいな。その悪知恵を勉強にまわせばいいのに・・・もったいない。

「次の列車は・・・伯備線新見行きか。まだ30分あるね。」

「・・・あいつら乗ってますかね？」

「あいつらって？」

まあどうせ大吾たちのことだろうけど・・・

「大吾たちのことつすよ。」

「ああ、東松江で降りたから・・・どうだろうね。」

どんなところで対抗心燃やしてるんだよ・・・まあいいや。

「まさかあいつらも東山公園ってことは・・・」

「そんなに心配しなくてもいいでしょ。」

ああ、先が思いやられる。雨も強くなってきたし。何もなければいいんだけど・・・

3-3、場内「警戒」?

7時35分、雨の影響もあってか2分遅れで822M普通列車が入線した。

「さあ、乗ろうか。」

ボタンを押し、ドアを開けてから車内に入る。車内にはやはり見覚えのある顔が2つ。浩ちゃん^{こう}と大吾^{だいご}だ。

「部長たちはどこまでなんですか?」

場の空気が凍りかけているのでとっさに質問する。横では仁君^{じん}が仏頂面^{ぼつくだいめん}をしている。そんなに嫌いなのか・・・

「伯耆^{ほうき}大山^{だいせん}だよ。」

「う・・・うちは東山公園^{ひがしやまこうえん}つすよ。」

何張り合ってたんだか・・・っていうか質問したの僕なのになんで仁君が答えてるんだ?

「まあ、お互い頑張ろう。」

さすが浩ちゃん・・・いや、部長。対応になれてる。さあ、次はどんな会話を?

「・・・」

無いんかい!・・・まあ浩ちゃんだからな。場の空気を感じ取ってないのかも。あれ、そうこうしてる間に着いた。結構時間短いな。

「さ、降りようか。」

仁君も無言で席を立つ。

「さて、サイコロ振ろうか。」

仁君はまだ不機嫌なようだ。そんなにあからさまに嫌わなくても。「そんなに怒ること無いでしょ。」

「べ、べつに怒ってなんか無いですよ。そんなにサイコロ振りたいんなら振らしてあげてもいいですけど。」

ツンデレ!? そんなキャラだったっけ? っていうか仁君がツンデレなんて・・・失礼だけど気持ち悪い。

「・・・振るか。」

気を取り直してサイコロを振る。出た目は5。

「5だから、武庫^{むこ}だね。」

「・・・」

「だから、何怒ってんの？」

「雨、強くなってないすか」

「え・・・」

気付かなかった。ちゃんと見るところは見てるんだ。少し仁君のことを見直したよ。

「そういえばそうだね。風も出てきたし・・・」

「・・・列車、止まらなきゃいいですけど」

「うーん、そう簡単には止まらないと思うけど？」

「だといいんですけど・・・」

過度の心配性か？仁君は。性格からは考えられないんだけど。

「何でそんなに心配してんの？」

「いや、前にもこんなことがあったので。」

「？」

「こんな話してもしようがないんですけどね。」

どうやら過去にトラウマがあるらしい。きになるし、少し探ってみようかな。

「いいよ。気になるし。聞かせて。」

3-4、この列車は現在47分遅れで運転しております。

「俺が小5のときの話なんすけど、春休みに家族で京阪神けいはんしんに旅行にいったんすよ。」

『まもなく特急やくも2号到着です。下がってお待ちください。』

仁「ねえ、これでどこまで？」

父「おかやま岡山まで行って新幹線に乗換だよ。」

母「しかしねえ。やくもは何とかなんのんかねえ？」

仁「え？」

母「乗るたんびに酔うんだけどねえ。ほんと、何とかしてほしいわ。」

仁「それ、きつと振り子に酔ってんだね。381系は自然振り子だから」

父「うーん・・・リニューアルしたばかりだからなあ。しばらく変える気は無いと思うけど。」

「別に普通じゃん。多少会話に鉄分が混じってるけど・・・」
「ここからですよ。本題は。」

父「こころ辺は雪がまだ多いなあ。」

仁「中国山地真ちゅうしんくさんちっ只中だからね」

母「ゆったりっていうくらいだから多少楽かと思っただけけれど、そうでもないみたいね。」

父「シートピッチとかが多少変わったただけだからね。乗り心地は変わらないよ。」

仁「さっきから川沿いだね。」

父「ああ、何川だろうな？」

「プワーン、プワプワプワプワプワーン」

仁「ん、何だろう？ 警笛連打しゅ《ドスッ、ドンッ》」

「連打して」と言い切らないうちに鈍い音が。

《ガガガガガガッ、キィキィキィキィキィ———》

父「うわっ」

急ブレーキで列車は停車。

『えー、急停車、大変申し訳ございませんでした。えー、お客様にお知らせいたします。えー、ただいま、えー、列車が何かに接触したため、えー、点検を行っております。しばらくお待ちください。』

えー、お怪我などされたお客様がいらっしやいましたら、えー、車掌までお知らせください。』

父「人、かな？」

母「ちよっと、変なこと言わんでよ。」

仁「そうだよ。こんな山奥の線路をわざわざ人が歩く？」

父「そりゃそうだけど・・・」

とかいっているときに車掌が慌てて運転室のほうへ走っていった。

「うわ、まさか本当に人だったの？」

「なっ、いつ誰がそんなこと言いましたか！ 最後まで聞いててくだ

さいよ。」

『えー、お客様にお知らせいたします。先ほど、えー、小動物……えー、小動物に接触した影響によりまして、えー、安全確認を行っております。お急ぎのところご迷惑をおかけいたしますがしばらくお待ちください。』

母「良かった。動物だった。」

父「良くないさー。嵯峨野のトロツコの指定券とってあんだぞ。」

仁「あーっ、そうだった！トロツコって何時？」

父「ちよつと待てよ……12時35分にトロツコ亀岡駅だ。」

仁「なーんだ、ぜんぜん大丈夫じゃん。」

父「ばか。車輪になんか挟まっていたら何時間も缶詰だぞ。」

仁「うっそー！」

父「いちいちでかい声出すな。」

そして数分、いや数十分過ぎたころだったかもしれない。

『えー、大変お待たせいたしました。確認ができましたので運転を再開いたします。なお、この列車は現在……えー、47分遅れで運転しております。』

仁「良かった。これなら間に合うね。」

父「そうだな。」

しかし、倉敷まで後数分というところでまた急停車。

仁「あー、もう。いったいなんなんだよ！」

父「落ち着けて。放送があるはずだから。」

しかしいつまでたっても放送が流れない。その代わり、運転士らしき人が後ろのほうへ走っていった。

仁「全然無いじゃん。どうなってんの？」

父「さあ……急病人か何かかな？」

仁「じゃあ、何で運転士が走っていったの？」

母「うーん、何の騒ぎ？」

父「ほら、お母さんおきちゃったじゃないか。」

『えー、お客様にお知らせいたします。お客様にお知らせいたします。』

仁「あれ、さっきの車掌と声が違う気が・・・」

父「確かに。」

『えー、ただ今車掌が・・・えー、車掌が急病のため・・・エー・・・アー・・・運転を見合わせています。しばらくお待ちください。』

仁「車掌が急病？そんな話聞いたこと無いよ。」

父「いや、でも運転士が意識不明ってこともあったから。」

仁「何で運転士は気付いたんだろう？」

父「無線で連絡でもしたんじゃないか？それ聞いてブレーキを。」

仁「なるほどね。」

母「ねえ、今どこら辺？さっきから何の話してんの？」

父「ばか。今放送があったろう。車掌が急病だって。」

母「ええっ！そんなことあるの？！」

父「お前まで仁と同じこと聞くなよ。」

『えー、お客様の中にお医者様などいらっしゃいましたら、車輛一番後ろまでお越しく下さい。』

母「なんか大事おおごとみたいね。」

父「そうだな。」

仁「ねえ、今何時？」

母「えーっと、9時になるとこ。」

父「覚悟はしとけよ。どうなるか分からんけん。」

仁「うん・・・」

結局、9じ30分過ぎに運転を再開。とりあえず倉敷に入線して代わりの車掌が乗務。結局岡山に着いたのは10時過ぎだった。何とかトロッコには間に合ったが、もうそれどころではないくらい精神的に疲れていた。

「・・・っていうどうでもいい話ですよ。」

「そんなことがあったのか。」

「・・・さあ、列車もきたし。乗りましょう。」

3-5、本心融解

思い出話を聞いたところで、15分遅れの942Mに乗り込む。なんか若干遅れが大きくなっている気がする。途中でまた浩ちゃんたちが乗ってきたけど、誰も話さなかった。まさかこのまま倉敷までこんな空気なんじゃ・・・なんて思っていると伯耆溝口ほうきみぞぐちで降りてくれて助かった。

「まさか倉敷までずっとこんな空気なんすか？」

「さあ・・・っていうか自分が避けてるんでしょうが！」

「だって、大吾が俺のこと避けてるんですもん。」

「まあそれもあるけど・・・」

「とにかく、ずっとこの調子なんてゴメンですから。」

で、僕にどうしろというんだ！？そんなこといわれても解決できるわけ無いし。

『まもなく武庫むこ、武庫です』

「・・・さっ、降りよ。」

なんとなく重苦しい雰囲気の中、29分遅れの10時2分に武庫に到着した。

「じゃあ、サイコロ振ろうか。」

「・・・」

「どうしたの？また雨のこと？」

「・・・このまま行って大丈夫なんすか？」

「え？」

「三江線さんこうよりはましですけど、伯備線はくびだってよく止まります。こんな山の中で1晩すごしたくないですから。」

「確かに・・・まだ武庫だし、今から引き返せば、最悪夜までには米子よなごに・・・」

「じゃあ、先生に聞いてみましょう！引き返してもいいか。」

「えーっと携帯携帯と・・・あっ！」

「ど、どうしたんすか！まさか・・・落としたとかいう漫画的展開じゃ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・圏外だ。」

「・・・公衆電話探しましょう。」

「まあ、大体の駅は中に公衆電話あるし。ここもあるでしょ。」

「あ、ありました！・・・祐さん・・・」
「ん？」

「小銭かテレカ持ってますか？」

「えーっと・・・あ、あった。30円。」

「あっざーます。」

仁君がボタンを押していく。

『もしもし』

「あ、もしもし。白崎先生ですか？」

『あんたらだれ？俺になんか用でも？』

「北河です。ちょっと質問が・・・」

『ああーん、何で公衆電話からかけてやがんだよ？てめーら偽者だな！さては詐欺師か！』

「いやいや、今武庫駅なんですけd『ふざけんじゃねえ！警察突き出すぞ。』」

「・・・」

『・・・分かったらさっさと切りやがれ！』

「ふざけんじゃねえぞてめえ！何が詐欺師だあ？黙って聞いてりや言いたい放題言いやがって！ほんものだっつーの！てめえこそ偽者じゃねえのか！？」

『おい、ふざけんじゃねえぞ！おりや、本物の白崎彰人だ！』

「ああ？じゃあ証拠を見せろよ証拠を！」

ん？・・・なんか会話がおかしいぞ。何のことはなしてんだ？

「ちょ、ちょっと仁君、何はなしてるの？」
「うっせーな。黙っとけ。」
自分の中で何かが切れたような気がした。
「・・・おい北河、電話切れや。」
「だから黙っとけて・・・」
「切れつつてんだよ！聞こえねえのか！」
「・・・祐さん？」
「うっせえ！さっさと切れ！」

「き、きりましたけど、」
「さっきの電話代は誰が出したんだよ？」
「す、祐さんです。」
「おう、俺が出したよな？その《俺の》30円で何無駄話してんだよ。」

「そ、それは・・・」
「あと、自分が何年生か言ってみろ」
「に、2年生です」
「俺は何年生だ？」
「さ、さ、3年生です」
「おう、つまり俺が《先輩》だよな。」
「は、はいっ」
「その先輩に向かってさっきの口の聞き方はなんだ？ええ！」
「ほ、ほんとにすいませんでしたあ。」
「・・・分かれればいいんだよ、分ければ。さあ、今度は僕が電話かけてみるから。」
「???」

「もしもし？」

『あゝ？またさっきの連中k「浮谷です」

『ふざけんじゃねえ人を変えたって無d「浮谷です」

『じゃ、じゃあ証拠はなん「浮谷です」

「はなし、聞いてくれますよね？」

『は、はい。』

「今武庫駅なんですけど携帯が圏外で通じないんです。それで駅前の公衆電話からかけてます。」

『なんだ、それなら最初からそう言ってくればいいのに。』

「で、質問なんですけど今から山陰本線までバックしても問題ないですか？」

『うゝん、すぐろく的にはだめだけど・・・』

「問題ないですよね？」

『いや、ちよつと・・・』

「あ、言い忘れてましたけどさっき仁君がかけたときの音声、録音してあるんですよゝ今から近くの郵便局へ行ってデータを警察か教育委員会に郵送・・・」

『も、問題ありましえん！どうぞ山陰^{さんいん}本線まで戻ってくだしやいゝ』
「そうですか。ありがとうございます。では」

【仁の心の声】（ああ、この人は敵に回しちゃいけないな・・・）

「と、いうことで戻っていいって。仁君。」

「は、はい。啓祐さん。」

「祐さんでいいよ。べつに。」

「は、はあ。ところで本当に録音してあったんですか？」

「そんなわけないでしょ！まあ、いつも撮影・録音機器は常備してるけど。」

「・・・すごいっすね。」

「で、折り返すとなると943Mかな？」

「そうっすね。」

「じゃあ、とりあえずホーム行こうか。」

いや／＼久々にキレたけど、スッキリした。仁君も少しは懲りたみたいだし。でも、ほんとに雨大丈夫かな・・・いまさら心配になってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820p/>

菊野中学校鉄道部～活動報告～

2011年7月28日03時33分発行